

保育における生活や遊びの中での音楽表現について 表現の助長となる音楽

Musical Expression in Life and Play in Childcare Music that encourages expression

山口 恵美子(東京福祉大学短期大学部)

Emiko Yamaguchi (Tokyo University School of Social Welfare Junior College)

(キーワード)

遊び、歌、リズム、表現活動、保育者養成

1. はじめに

保育園では、朝の歌や帰りの歌をはじめ季節の歌、その他子どもたちが楽しめる歌などを取り入れたりしている。また、行事では入園式や卒園式始め七夕会、ひな祭り会などその季節に応じた歌が歌われている。子どもたちの普段の遊びの中で歌や手遊びをするなど日常の中に音楽が溢れている。そして、友達と遊んでいる時も好きな歌を口ずさみながら遊びに夢中になっている姿が見受けられる。時には 既成曲ではなく音楽以前の音程にあてはまらない歌を歌い音楽表現の原点ともいえるものをつぶやいている子どもたちも見受けられる。

子どもが興味を持ったものをより深く楽しむためには、保育者側がどのような援助をしていくのかを工夫する必要がある。子どもたちが興味を持ったことに対して自然とイメージが膨らませることができ、その活動がより楽しめるような歌やリズムをはじめ効果的な援助を音楽の視点から捉えて保育者養成の授業の中で実践を行った。

2. 折り紙のかたつむり

(1) 園での様子

園では、6月の梅雨の時期になると6月ならではの部屋飾りや作品づくりなどその時期の環境づくりが行われている。子どもたちに親しみのあるカエルやかたつむりなどが挙げられる。

折り紙で子どもがかたつむりを折ることはまだ難しいため、保育者が作って子どもたちの目に触れるように飾っておいた。気が付いた子は、かたつむりを欲しいと言い保育者にかたつむりを作ってもらう様子をじっと見つめていた。折り紙の仕上げにかたつむりの殻を開いていくところがあるが、殻が破れないようにそーっとそーっと開いていく時に子どもたちみんなで「かたつむり」の歌を歌ってかたつむりが可愛くなるように応援をした。2回ほど歌うとちょうどかたつむりの殻が無事に開け完成となった。その時にみんな拍手で喜んだ。実際には子どもたちは作ってはいないものの殻を広げる時に歌うことで応援をして自分で完成したと同じような気持ちになり達成感を味わっていたと考えられる。

(2) 歌う際の伴奏効果について

保育現場では、かたつむりを開くのが保育者であったため楽器を使用することはなく歌のみであった。一方、保育者養成の授業においては、学生たちが保育者役となってかたつむりの殻を広げながら歌った。その様子に合わせながら筆者が「かたつむり」の曲をキーボードで伴奏をつけた。キーボードでは、音色が選べるため全員で合唱するためのピアノの音ではなく、バックミュージック的な伸びやかなストリングスの音を選択し、かたつむりが開くタイミングを見ながら合わせていった。殻が開くまで歌の繰り返しとなり、2回目は、1オクターブ上げてかたつむりの可愛らしいイメージが出

るように変化をつけていった。伴奏も楽譜通りではなくイメージに合いそうな伴奏で演奏を行った。そして、殻が開いてかたつむりが完成した時に出来上がりの効果音をタイミングに合わせて入れていった。「かたつむり」の歌を通して保育者側とかたつむりを応援する側が自然と気持ちを合わせることでより一体感が感じられ、かたつむりが完成した時の達成感を味わうことができたのではないと思う。

3. 製作遊びの中での歌の活用

(1) クリアホルダーの製作遊びについて

色と形から連想してよく知っているものを発見して楽しむという狙いで行なった。

中央を丸くくり抜いた白い紙をクリアホルダーに挟んで覗き込み、そこから見える世界を楽しむとともに、丸から何を連想したのかの意見を出し合った。加えて、そのクリアホルダーに選んだ色画用紙を挟むことにより、色と形から連想するものを見つけてホワイトボードマーカーで描き足すことによって色々な物が出来上がることを楽しむ遊びである。失敗しても消して何度も書き直しができるため安心して気軽にのびのびと描くことができるという利点もある。ホワイトボードマーカーも色を選ぶことによってよりイメージの近い物に仕上がるのも一つの楽しみである。

参加者は、丸という形からそれぞれのイメージを基に自由な発想で思い思いに描くのを楽しむ姿があり、個性豊かな作品となった。

(2) 製作遊びの中での音楽の活用について

作品を作っている時に教室前方のホワイトボードにあらかじめ歌詞を大きく書いておいた。丸からどのようなものが出来たかそれぞれ紹介をする際に席を立て始めは裏を向けて持ち、皆が見合えるよう円の隊形に並ぶようにした。予めキーボードに曲を録音しておき「まる・・・さんか・くしかくでショー」の前奏を流し、歌い始めのところで「いちにのさ

んはい！」と タイミングを取りやすくした。曲がかかると持っているクリアホルダーをリズムに合わせて左右に揺らし、歌の終わりのところで「ジャン！」という効果音のタイミングで一斉に表向きに返してそれぞれの作品をお互いが見えるようにした。

活動は製作遊びであるが、ただ作っておしまいではなく作ったものを紹介するときに歌や音楽を取り入れることでリズムに合わせてその雰囲気共有するという経験を通して新たな発見や気づきそして楽しさが倍増しのびのびと表現できるのではないと思った。

続いて三角か四角を選択し、丸と同様に好きな色画用紙を挟み思い思いに描いた。発表は、三角の人が前に出て曲に合わせて発表を行なった。続いて四角の人も同様に前に出て発表を行った。曲が5小節と短く歌詞も単純なため、しっかりリズムに乗って楽しむことができていたようだ。歌を上手く歌おうとするのではなく、あくまでも作った作品を紹介するための雰囲気を盛り上げるアイテムとして曲を使用していった。こうしていくことでひとつの活動をよりのびのびと楽しく表現できるのではないと思った。

4. 考察

子どもたちの表現活動がより充実したものになるには、保育者側が音の環境を意識して音の持つイメージとその時々の子どもたちの興味関心などの様子をしっかりと把握し、それに適した効果的な音の使い分けをしていくことが重要であると思った。遊びの中でそのイメージがより味わえるような音を環境として用意するという意識を持つことは、子どもたちの表現活動において更なる楽しみを味わうことができ新たな遊びの展開へと繋がっていく重要な役割があると考えた。